

近世史學史上に於ける國學の貢獻

村岡典嗣

近世學問史上、史學と國學とは、古書の學として共通の淵源を有し、その發達の過程に於いても相交渉し、頗る密接な關係を保つてゐる。夫にも拘らず、その間、兩者夫々成立の由來と本質的意義とを別にし、夫々の特性に於いて、他に寄與した。茲に論ずるのは、史學史から見た國學の貢獻である。

近世に於いて、史學の或程度の發達は、國學の完成に先立つた。而してその史學の主な業績としては、本朝通鑑、大日本史、及び新井白石の著書がある。林家の本朝通鑑は、羅山に初まり、寛文十年春齋が之を完成した。水戸家の大日本史は、

其後二十九年の元祿十二年を初めに、寶永六年、正徳五年と數次の階段を経て、享保五年に初撰本として成就した。終に白石の著書は、大日本史の成立を、時代的にはほぼ追うて成された。本朝通鑑と大日本史とは二大通史である。後者の大義名分論に基く三特筆は別として、兩者は史書としての大體の性質に於いては、努めて史料を聚集して史實を撰擇し、それを文華修飾のない平叙體の漢文を用ゐて編年體に記述し、専ら「直書事實勸懲自見」といふ支那の史書に範つた點で、相同じい。尤も差異について見れば、一は鑑戒の爲に直書を忌まず、否寧ろ敢てしたのを、他は同じ目的から往々之を謹んだこと。一は通鑑を學んで紀のみで

一は史記を學んで紀傳であること。一は後陽成ま
でを含み、一は特に近代を避けて後小松に筆を擱
いたこと等がある。而して、史學史上兩著の有す
る意義は、その少異に於いてはなく、大同に於い
て、あつた。白石の著書は、假に、古史通、遺文
中の史論、讀史餘論、藩翰譜、及び折たく柴の記
と順序づけると、やがて神代以來の全史を含む。

古史通は神代紀を全然史書として取扱ひ、建國史
を闡明せむとしたもの。史論は上代史上の諸問題
を捕へて評論せるもの。讀史餘論は夙に愚管抄や
神皇正統記が、夫々別種の立場から或程度まで試
みた國史の時代別觀をば發展させて、政權推移の
段階を明らかにしたもの。藩翰譜は、藩別的に記
した徳川幕府創業史。折たく柴の記は、自叙傳體
の現代史で、政治上、財政上、外交上諸般に涉る
彼の識見や經倫を含む。而して彼の著書は、第二
の史論を除いては、凡て純正な和漢混交文體であ

り、固より精確な日附はあるが、しかも單なる編
年的記載でなく、年代記的性質を全く脱却して歴
史的敘述に入つて、文學的効果を伴ひ、その史論
亦單なる部分的評論のみでなくて、全汎的概觀の
域に達した。是等凡て、前二大通史に對して特色
を發揮し、史學史上一層の發展を示す。殊に彼の
研究の態度が、一層批判的學問的であつたことは
大日本史が上代史に於いて、主として日本紀續紀
等を祖述して、その外に出でなかつたのを非難し
て、かくては「本朝の始末大夢中に夢を説き候や
うの事に候」といひ、韓史は支那史との比較研究
の必要を力説したことに徴せられる。併も史觀
即ち歴史の本質について意識した所に至つては、
所謂「史は實に據て事を記し世の鑑戒を爲すもの
也」で、尙全く前二大通史のそれと同様である。
彼のこの史觀と、兼て研究方法の學的態度とを、
最もよく代表する者は、古史通の神代史研究であ

る。彼は先、在來神道家が舊事記、古事記、日本紀の神代卷を經典視して、様々に儒佛の理を附會して、神祕的解釋を試みたのを斥け、三書は經でなく史で人事を以て解すべしと爲し、その方法として、古書を解釋するには字に拘まず、言によるべき事。三書夫々撰者の主觀的傾向があるから、一によらないで比較通覽し、なほ國史實錄をも徵として理義に長せるものを求むべき事の二つを擧げ、之を適用しつゝなほ解し得ないものは譬喩的解釋を試み、夫をも容れ得ない奇異荒怪の説は、凡て之を除去した。例へば神は人の尊尙で、神代紀は凡て建國の英雄の事蹟。高天原は多珂海上の地で、常陸の地名。二神の國生みは、國土經營。みとのまくはひは、二神率ゐる軍の合一といふ類ひである。此種の試みは、部分的には決して珍しい所でなく、神典解釋家の間に見たところであつたが、かく學的基礎に立つて全汎的徹底的に實行

したのは彼である。元來神代史は、文獻のみによつて明らか得べきでなく、白石の試みも、畢竟、當然不成功に了つたのであるが文獻を唯一の資料とする限りでは、古史通の研究は、史學上承認すべき業績である。併も吾人の爲に茲に問題となる所は、白石が求むべしとした事實といふ事である。そは彼の考へた所によれば、畢竟常理を以て解し得べき人事の謂で、理義に長せしといふも、この標準に基いて言つたのである。人事の常理は、一面古今を通じて不變であるから、之を標準として史料を取捨して、實を記すのを歴史の目的と爲すのは、固り誤りでない。併し、決してそれ丈で充分ではない。抑も歴史の求むる實とは、單なる事實に止り得ないで、そは更に眞なる實即ち意味にまで之く。實に即しての意味、意味に即しての實之が歴史の求むる所である。歴史が單なる年代紀に止り得ないのはこの故で、こは二大通史の編者

も、殊に白石の當然式程度まで理解し、實行した所であつた。併も、史實に即しての意味を發揮せんが爲には、所謂常理以上に、事件や時代の特殊性を理解する事が必要である。況して所謂常理に勸懲主義といふ如き、史家の主觀的色彩が存在した場合には、それを脱却し除去するの必要さへある。近世史學が、茲に一層の發展を爲さんが爲には、上記の儒教主義の「直書事實爲鑑戒」的史觀丈では、未だ不充分であつた。國學は別種の視野を開拓した。

國學は本居宣長の學問によつて完全に代表される。本居學は、元祿以來、仁齋、徂徠どうけ、又契沖、春滿、眞淵と發展した儒學和學兩方面に於ける古學の運動を、和學の側から大成したものであり、時代的には、眞淵、宣長二代は白石を承け恰かも學問史上史學に相續く。宣長の學問は、自

ら稱して古學といひ「凡て後世の説に拘らず、何事も古書によりて、その本を考へ、上代の事を審かにする學問」と定義した所に考へ、又、古典の註釋を主とした五十餘種百八十卷の著書に徴して所謂“*Erkennen des Erkantenen*”即ち古代人の意識の再造を標榜した獨逸の *Aug. Becht* (一七八五(天明五)生—一八六七(慶應三)歿)の *Philologie* 即ち文獻學として最も完全に之を理解し得る。更に重要なのは眞理の追求者としての學問的精神である。彼が、學問の爲には眞理は師より重んずべしとし、曲學阿世を斥け、學說に進歩あるべく、しかも又新説を出すには飽迄慎重なるべきを言へるいづれも夫で、そは、元祿以來の古學の自由討究の精神を徹底させたものであるが、殊にその發現として、古書に直面して、後世の附會的解釋や合理化を一切斥けて、その眞意をありのまゝに闡明するといふ客觀的態度の徹底的に存在した事が注

意される。彼のあくまで試みた漢意や佛意の排斥は、この結果で、そは決して往々考へらるゝ如く單なる愛國的自尊心の偶然的産物でない。而して茲に彼の學問成立上の理論的及び歴史的原因として契沖の影響の意義が特に注意される。さて宣長は、古學の概説を試みた初山踏では古學の機能としては古書の校合、眞偽の判定、及び註釋を擧げ學問の筋としては、道の學び、律令、有職、六國史以下諸書及び歌（作歌と歌學）夫々の學の五類を擧げた。又著書の成績から概観すると、訓詁註釋を形式的方面として、そのうちに形成された學説として中古文獻學又は文學説、上古文獻學又は古道説及び兩者にわたる語學説の三つがある。而して彼が學問を通じて求めた所謂古への事とは、抑も何ぞ。彼によれば、そは結局、古への言とわざと心とに分れるが、而も三者は概ね一致する。後世で、古人の思へる心、爲せるわざを知つて、其世

の有様を正しく知る所以は、古言古歌を知る事によつて爲しうる。こは眞淵が「いでや千五百代にも變らぬ天地には生まれ生る人、古への事とても心言葉の外やはある。しか古へを己が心言葉にならはし得たらむ時、身こそ後の世にあれ、心言葉は上つ代に復らざらめや」の考を承けたもので、所詮古への事とは古への理念を意味し、理念の發現として、言も歌も又わざも所謂一致する。これが即ち、その學問の對象とした古意で、そは上記の史學にいふ實とは異なる。彼の學問は、凡てこの古意の闡明を目的とする。中古學では、榮賀物語よりは源氏物語に重きをおき、それによつて所謂物のあはれを明らかにし、源語の眞意を發揮すると共に、平安朝文化の *Sentimentalism* を明らかにした。上古學では、史書として遙かに整つた日本紀よりは、言傳へを伴つた傳承的書物たる古事記を重んじて、それによつて古代人の意識内容を、進んで

古代精神の *Naivism* を明らかにした。而して兩者の手段として古語の學が存した。本居學が文獻學たる本質的意義に於いていかに在來の史學と異なるかは古事記傳に於ける神代紀事の諸々の解釋を、白石のそれと比較する事で明らかである。彼は、白石の著書の二三を閲讀した徵證があるが、古史通はそのうちにない。宣長の白石に自ら一致する所は在來の神道家の經典の見解と儒佛への附會とを斥けた事と、古言の解釋に於ける語學的態度とである。併も異つた所は、先古事記に中心價值をおいて、白石の如き三書の通覽を事とせず、殊に舊事紀を偽書として斥けた事を始め、古傳説の解釋上白石の如き *Euhemerismus* は、私意の漢意として之を斥けた事である。かくて彼は、神とはあくまでも古代信仰の對象たる威力者、天照大神は太陽で同時に皇祖たる神格、高天原は地上の帝都でなくて天二神の國生みは文字通りといふ如く、凡て

文面のありのまゝに解して、その含む神話の奇怪も、矛盾も、不合理も之を認めて、一切の譬喩的解釋や合理化を斥けた。是に於いてか、宣長の求めた古の事は白石の實ではなく宣長の神典學は決して一般的意味の史學でない。歴史として見むか、歴史そのものではなくて „die erkannte Geschichte” 即ち上代人の考へた歴史である。 „die erkannte Geschichte” のうちにも、固より幾分の史實は存すべく、其限りでは歴史である。随つて宣長の古學の分類中にも、自ら六國史以下諸書の學があり、「爲せりし事は史に傳はれる」と考へられ、古事記傳其他の著書のうちにも、少なからぬ歴史的研究が含まれてゐるが、その關係は、中心を異にした二圓の圓周の交錯に比ぶべきものとして存する。而して本居學、即ち國學の史學の爲に貢獻すべき眞の意義に至つては、寧ろこの本質に存した。まづ、國學が古書の判定釋義に多く開拓する

所あり、その古書又史學の爲の資料たる所から、こゝに國學の業績が史學に寄與すること大であつたのは、寧ろ明白である。しかも遙かに重要なものとして、一層内面的方面が考へられるだけし古意の再造といふ事は、事實を荷ふ精神を理解する事であり、事實を精神に於いて理解する事である。是に至つて、單なる史實は始めて眞實となり、時代は時代精神によつて解され、而もこゝにその客觀的態度を以てして、よく、儒學派史家が往々陷る道德的見識や主理主義にわづらはされての主觀的強解、又は曲解を脱して、その眞相を發揮し得る。かくて、歴史は事實的から内面的となつて一層完成されると共に、政治史から文化史、思想史の境地を開拓し來るべきである。しかも大體に於いて、斯の如き史學への貢獻は、本居學そのものに於いては、未だ可能性として潜在して、明らかに實現されるには至らなかつた。こはやがて、彼

の學問が、文獻學の領域に止つたが故であるが、精しくは三つの理由が擧げ得る。第一は、文獻學として宣長學の主題とした所が、古代や中古といふ完成された一時代であり、その各時代についても、理念に於ける綜合觀に傾いて、事象に於ける分化や發達を跡づけるに充分でなかつた。而してその古代と中古との關係に於いても、何等發展的見方が試みられなかつた事である。第二には、文獻學そのものとしても、所謂漢意、佛意の排除に専らな餘り、上古文化中古文化に於ける儒教佛教の影響感化の存在や推移の事實を、充分に理解しなかつた事である。更に第三に、彼の研究した古典が、上古中古のものに限られて中世後の史書には殆んど及ばなかつた事である。宣長學から出て、國學の史學への貢獻を或程度まで實現したのが伴信友の學問である。

信友は、平田篤胤と共に、宣長歿後の門人で、共に最大の學徒である。篤胤が道の學び、即ち神典學を主として、宣長學の主流を承けたに拘らず所謂道の學びてふ性質上、宣長學を神學的、思想的に發展させて儒佛又天主教をさへ取入れ、爲に

一面、自ら宣長の學的方面の域外に出ざるを得なかつたのに對して信友は、道の學びを全く宣長に委ね、その他の方面で、宣長の文獻學を純粹に繼承し發展させた。かくて宣長學に比して、一層多く史學に貢獻し得た事は、種々の點から考へられる、第一普通稱せらるゝ考證學的性質に於いては、信友は、宣長の學風の綜合的なのに比して個々の事象に於ける考證を主として、寧ろ分析的であつた。同じ神道の方面でも、祭儀や神社の方面を専ら研究した事は、その一例である。第二には、宣長が未だ大體着手しなかつた六國史以後の史書や文書の研究に力を注いで、精細な校合や考

證を試みた事である。是等が、史學上に多大の寄與を爲したことは、寧ろ言ふまでもないが、更に進んで、第三に、上述の內面的方面の貢獻に至つては、吾人は之を、中外經緯傳中の聖帝考、及び長等山風に於いて、見ることが出来る。

中外經緯傳は、完成は天保九年(一八六六歲)であり、朝鮮、支那琉球等と我國との交渉史であるが第二卷に文化三年(三十四歲)十二月の奥書ある聖帝考がある。思ふに、この部分は、本書の萌芽で又或は述作の動機を含むものである。本考に於いて、彼は應神帝が、末子稚郎子を皇嗣に選れた事稚郎子と大雀命との漢學々習、帝崩後大山守命の叛、大雀、稚郎子兩皇子の皇位の讓合、仁德帝の即位と仁政等についての、紀記の記事を比較して日本紀の古事記に比して、漢文風の潤飾の多い事實を注意し、こゝから出立して、次の如き説を爲した。曰く、由來朝鮮との交通は神代に淵源し、

漢字漢文の傳來も、三韓事件以前已にあり、三韓の歸化人やそれに學んだ本邦人の間に、古來の傳説が記載されて、家々に傳つた。三韓事件があり漢學が公けに傳つて後は、此事が一層行はれ、隨つて古傳説や史實の記載に比較的古代のまゝと、比較的漢文的潤飾の多いものとの二種を生じた。前者を代表するのが古事記で、後者を代表するのが日本紀である。而して問題とせる箇所の記事に於ける記紀の差も茲に由來する。しかも漢字漢學の傳來の影響は、實に當然、時代精神の上にも存した。二皇子の皇位の讓合も、仁徳帝の仁政も、兩者が漢學の最初の學徒としての支那の聖賢かぶれの傾向が、事實として多少とも存在した結果であり、紀記はその事實に基いて記し、たゞ日本紀は、古事記よりも遙かに多くの潤飾を加へたのである所謂仁政の如き、そのまゝには當時の事情から考へて、明かにありうべからざる誇張を含む。而し

て、二皇子始め關係人物が上代の自然人として、決して支那流の道德的人物として行動しなかつた事は、上記の潤飾に誤られないで、紀記の記事を比較する事によつて解る。けだし、應神帝が皇位の繼承について、二皇子の意見を徴したのは、最愛の末子を立てたい下心がありながら、二皇子に心をおいた爲であり、後に大山守皇子の亂のあつたのは、事の自然の結果、二皇子の讓合も眞情からではなく、稚郎子として大雀命の心中を察して我身の不安を思つた爲であり、大雀命としても、始めから王位を望む下心のあつた事は、建内宿禰との贈答の歌からも推量される。稚郎子の自刃もこの間の複雑な事情があつて已むを得ぬ結果である。次に、仁徳帝即位後の仁政も、民心を懐柔しようとの御謀からされた、幾分の事實があつたに過ぎず、帝が決してさる聖帝ぶりの人爲でなかつた事は儒教の立場からは非難すべき、多くの戀愛

事件の主人公で坐した事から、明らかであると。以上の考へは紀記の記述の比較からして、我上代文化に於ける支那の影響の早くから存した事實とその影響の意義とを明らかに、古事記の代表する純古代意識と、日本紀の代表する儒教的意識との重存を明らかにして、上代精神の真相を發揮し、さる時代精神の理解のもとに、記載された事件の内面的意義と關係人物の心裡とを明らかにしたものである。大日本史や本朝通鑑の、ほん日本紀を簡約した外面的記述とは全く異り、白石が「史論」に言及した超越的評論に比して、遙かに内在的であり、又、古事記によつて理解した宣長の上代文化觀が儒教の影響の事實を全然無視するに傾いたのよりも、はるかに史實に即してをり、純古代精神の儒教化の過程を認めた點で、一層歴史的であると言へる。

第二に長等山風は、壬申亂論で、その説に曰く

天智帝は其初め、然るべき事情で皇太子に皇弟大海人皇子を立てたが、晩年我子可愛さの眞情に惹かれ、加之鎌足の心添さへあつて、大友皇子に代へたく思ふに至り、そを下心にもつて、何げなく大海人皇子に讓位を議つた。皇子は帝の心を察して、自ら辭して吉野に入つた。なほ裏面には、この二人の間には、夙に額田女王を中心とした、上代の自然人らしい戀愛上の争さへ存した。かくて帝歿し、大友天皇の代となるや、自然、大海人皇子の爲に身邊に危険を感せしむるやうになり、皇子は已むに已まれないで大友皇子に叛き、終に大亂となつたが、皇子は絶えず眞心を捧げて天照大神に祈つて、その加護をうけて戦に勝ち、天下を平定した。而して即位後、天武帝は固り已むなき故とはいへ、大友天皇の爲に心中に安んぜず、或は三井寺を建立せしめ、或は神を祭り、佛に供養した云々と。而して、書紀はじめ古書の史實を考

證したり、萬葉集や紀の歌謠に徴したりして、其の事情を明らかにすること頗る精細である。元來壬申亂は、國史上の一大事變として、古來論議され、正統記は特に之を論じなかつたが、天武帝の繼統の稱徳に絶えて、光仁帝が天智帝の孫として即位したのを「正しきに復るいはれなること」と評して天智帝や大友皇子に同情する意を洩した。正統記に負ふ所多い白石は、大友皇子の即位を認め、天武帝を難じ、天智帝の繼統の復活を「天の有道になし給ふ所明らけし」とした。大友天皇を帝紀にたてた大日本史が所見は、安積覺が「天武帝背大友帝之盟而、虐取大友帝之天下」の一句に、之を徴し得る。而して上記いづれも、天武帝を難じ、天智帝を中興の英主としてたゞへたのに對して、信友は一方に、大友天皇の即位を認める事には大日本史に賛しながら、他方に天武帝の心事と眞情とに同情する所から、上記天命論の見解に對して

も、例の儒教風の空論、世上の事實に違ふとなし壬申亂の責任は天智帝が變心にありとなし、更に帝は徒らに支那模倣を事とし、朝廷衰微の基をなしたので、中興の英主などいふべきでないとした天智帝論は暫くおく、又壬申亂の史實の考證も、一々については論議の餘地もあらうが、信友が所論が、頗る事件の内面的事情人物の主觀的心理に立入り、單に正史の表面的記事を祖述せず、又空疎な超越的史論に陥つてをらぬ事は承認すべく、以て、聖帝論と同例に論じえよう。なほ、壬申亂については、明治初年天死した神道家鈴木雅之の未刊の論文に、天智帝が初め大友をおいて大海人を皇太子に立てたのは、例の聖帝めかしくふるまつたので、晩年人情の自然に歸つて之を變へ、爲に大亂の源を爲したとある。こは信友が言ひさうな事である。併し、當時の皇位繼承の事例は必ずしも父子相繼ぐを原則としなかつたので、天智帝

が天武帝を皇太子に立てたのは、寧ろ外に然るべき故があつたのである。信友が「御母帝の遺詔にや」と言つて軽々しく其好む所に引つけて説かなかつたのは、寧ろ彼の史家としての確さを示す。

近世史學史上、國學の斯の如き貢獻が、其後の

黎 軒 と 大 秦

藤 田 豊 八

一
黎軒といふ國名の見ゆるのはいふまでもなく史記の大宛傳が初である。即ちその安息條に

其西則條枝 北有菴蔡・黎軒

といつて居る。これは張騫が第一次の西使、^(一)即ち

そが大月氏に使用して、見聞したところを武帝に覆命した安息條中の末段である。而して安息は大宛

史家にいかに appreciate され、又發展させられたかは別種の問題である。しかも思ふに、それは近時西洋史學の影響のもとに、漸次に開拓されむとする、國史の文化史觀や思想史觀の爲に先蹤としての意義を許さるべきものであらう。

傳に所謂「騫身所至者、大宛・大月氏・大夏・康居、而傳聞其旁大國五六、具爲天子言之」とある傳聞した大國の一で、従つて安息條記するところのもの、は皆な之を傳聞に得たものである。又た大宛傳には張騫第二次の西使、^(二)即ちそが烏孫に使した以後の武帝西方遣使の情形を述べ、

初置酒泉郡、以通西北國、因益發使、抵安息・奄蔡・